

映画音声ガイドの現状

The current state of movie audio guide

—ユニバーサルシアターの設立に向けて—

—Towards the establishment of the Universal Theater—

平塚 千穂子[†]

Chihoko Hiratsuka

† バリアフリー映画鑑賞推進団体シティ・ライツ † Barrier-free movie promotion organizations City Lights
E-mail: † mail@citylights01.org

1. バリアフリー映画とは

「バリアフリー映画」とは、映画を鑑賞する上で様々なアクセスバリアをかかえた人たちと、共に映画を楽しむことができるよう環境を整える映画のことです。最も映画鑑賞が困難とされる目の不自由な方々も、セリフの合間に場面の視覚的情報を補う音声ガイドナレーション（副音声）を聴く環境を整えれば、映像を想像しながら楽しむことができます。また、耳の不自由な方々も、日本映画に字幕をつける、手話をつけるなどの環境を整えれば、日本映画を楽しむことができます。

2. City Lights の紹介

団体名は、チャップリンのサイレント映画『街の灯』からとりました。「目が見えない人たちにも、映画に出会った喜びや感動を伝えたい」という思いから、2001年4月、バリアフリー映画鑑賞推進団体 City Lights を立ち上げました。

活動のメインは、映画館にご協力いただき、映写室で行う場面解説の音声ガイドを、FMラジオのイヤホンで聴きながら鑑賞できる「シアター同行鑑賞会」の開催や、音声ガイド勉強会・講習会の開催の他、映画情報のサポート活動として、音声ガイドだけでは説明しきれない映画の詳しい解説や、音声ガイド付きDVDの発売情報、各地のバリアフリー上映情報等をお伝えするメーリングリストの運営も行っています。また、行政や福祉施設・団体から、バリアフリー上映会の開催方法のお問い合わせや、音声ガイドの制作依頼も増えてきたため、2009年に、バリアフリー上映の様々なノウハウや取り組みを紹介するため、全国バリアフリー上映サポートネットワーク（ABC ネット）も作りました。現在は、全国から20団体が加盟。シティ・ライツが事務局を担当し、全国のバリアフリー上映会を加

盟団体と協力しながら支援しています。

2. 映画音声ガイドとは

映画は視覚によるところの大きい芸術です。ですから「見る」ことにバリアがあるのは言うまでもありませんが、映画の面白さは、「見る」ことだけがすべてではありません。ストーリー、音楽、音響、役者の演技など、作品の一部を直に感じながら、見えないことでリンクしない視覚的な情報を、言葉で補うナレーションがあれば、作品の伝える情報を100%といわずとも、50%でも60%でも受け取ってもらえるのではないかと考え、私たちは「見えること」を言葉で補いながら、一緒に映画を楽しむ方法を考えてきました。これが「映画音声ガイド」です。まず、字幕スーパーでしか上映されない外国映画については、字幕を読み、重要なセリフの情報を伝えます。それから日本映画と外国映画、共に必要なのは、場面状況の説明ですが、これはテレビドラマに付いている副音声と同じように、セリフの合間や場面転換などでナレーションを挿入します。ただ時や場所、動作を説明するだけではなく、映画的なカメラワークや演出なども分析し、作風を崩さないように表現します。これはより映画を、映画として楽しんでいただく工夫の一つです。言葉の選び方にもとても気を使います。

3. 音声ガイドづくりのノウハウ

3.1 鉄則

セリフや重要な音に被せない

＝映画の音・音声をきちんと聴かせる。

＝セリフや音でわかる情報は説明しない。

例) (電話の音) リリリリーン ×電話がなる

恵子「ここはどこ？」×場所をたずねる恵子

恵子「・・・」 ×無言の恵子。

3.2 何を説明するか

(1) 字幕・テロップ等の文字情報

(2) 何が起きたか。人物の動作・行動など。

4W1H (When, Where, Who, What, How)

いつ、どこで、誰が、何を、どんな風にしたのか？
<特にシーン変わりのどこ？は重要>

※Why (なぜ) まで説明すると、想像の余地がなくなり、自分で感じ取る楽しみがなくなってしまうので注意しましょう。

(3)画面に映しだされた物や風景

主観的に感じ取った印象を、断定的に押しつけないように。映っているものを、客観的表現するよう心がける。

(4)セリフの中の指示語

登場人物の話の流れについていくため。

3.3 耳でイメージする人の立場にたった配慮

(1)主要な人物や場所は、はじめて登場した時に、できるだけ早い段階で説明をし、先にイメージを構築する。

(人物の風貌、関係、名前、建物の構造、雰囲気など？
<名前について>

・誰かわかるまで言わないか言うかは、その人物のガイドの頻度によって決める。

・後でしっかり紹介される場合は最初から言わない。

・登場人物が多すぎる場合は、名前と言う人と関係性や職業で言う人と使い分ける。

・音声ガイドで呼び名を決めたら、最後まで一貫させる。(人物の声と名前を一致させ、記憶させるため。)

(2)感情を表すしぐさや表情は、解釈を押し付けず、聴く人の想像の余地を残すよう客観的に説明する。

例) 悔しそうな様子→ 拳を握りしめる。
唇をかむ。

悲しそうな様子→ うつむく
視線をおとす
肩をおとす

×「仕方ない」という顔で出ていく。

○あきらめたように出ていく。

(3)聞きやすく、わかりやすい文章をつくる。

→ 思考がとまり、映画から気持ちが途切れないようにするため

・漢字を見ないと瞬時に意味が伝わりにくい熟語はつかわない。

例) 月光の下→月あかりの下

瘦身の男→痩せ型の男。

・対象に3つ以上修飾語をつけない。

例) ×目が大きくて、耳の垂れた、足が短い、毛がふさふさとした、小さな茶色い犬。

○茶色い小さな犬。垂れた耳に大きな目。足は短く、毛がふさふさとしている。

・主体が最後にくる3文節以上の長い文章をつくらない。

例) ×楠のそばまでいき、コートを脱ぎ、大きく枝分かれした巨木の姿をまじまじとみつめる誠吾。

○楠の側までいき、コートを脱ぐ誠吾。大きく枝分かれした巨木の姿をまじまじとみつめる。

・同じ言い回し、同じパターンの文章を、頻繁に繰り返さない。

同じ言い回しばかりだと単調なイメージをいただいています。「見る」「見つめる」「微笑む」などは使われる機会が多くなります。いろいろな表現ができるように心がける。

例) 視覚的な表現:見る、目を向ける、目が合う、町を見渡す、チラッと見る、視線を移す

歩く・走るの表現:そっと近づく、歩み寄る、にじり寄る、とぼとぼ歩く、駆け込む、走り出す

・作風にあった言葉を選ぶ

例) 外国映画:風呂場→シャワールーム
居間→リビング

時代劇:キッチンでごはんを炊く
廚で飯を炊く

3.4 カメラ演出の意図を読み取る

カメラ演出は、決して無意味に行われているものではありません。その演出意図を考えれば、何を優先して音声解説すべきか、自ずとわかってきます。

・被写体が大きければ大きいほど、ドラマチックな意味合いも大きくなる。

・下からあおると、被写体が大きく・強く見える。逆に見下ろすと、被写体が小さく・弱く見える等

【 クローズアップ 】 = 人物や物への接写
わざわざアップにするのには強調の意図がみえます。
→音声ガイド優先

★「体言止め」を使うと強調される。
被写体が大きい程、見る人の集中度も強いので、見せる時間が短い →「体言」でコンパクトに表現する。

・人物の心理をあらわしたい時

(例) ~の不安げな表情。

・細部を説明したい時

(例) ~の目に光る涙。

・はっきりと明示したい時

(例) メモには「さようなら」の文字。

【ズームイン】＝遠くから近くへ

遠くから眺めていたものに、わざわざ近づき、大きくみせていくのにも強調の意図が見えます。

→音声ガイド優先

- ・人物の注目したものをみせたい時
(例)～の視線の先には△△がある。
- ・人物の回想への前触れ
(例)～の脳裏に△△が浮かぶ。

4. 視覚障害者の意見を聴く

視覚障害と一括りに言っても、先天盲、中途失明、弱視、視野狭窄など視覚経験はさまざまです。見え方の違いによって音声ガイドへの要望も異なりますが、複数の目でチェックして意見交換することで、独善的なフィルターを通さない、客観的な見方ができます。作りはじめのうちは特に、複数の目と、複数のモニターと意見交換をしながら、多様な見方があるということを理解した上で、音声ガイドづくりに取り組みます。

・色について

先天盲の視覚障害者は実際には色を見たことがなくても経験や学習によるイメージを持っています。(例:赤＝情熱的なイメージ 白＝清潔なイメージなど)色の説明が無駄ではないかという質問をよくいただきますが、演出上効果的に使われている色については説明を推奨します。

・特に先天盲の視覚障害者がイメージしにくい表現

例)遠近法で見え方がかわるイメージ

×去っていく姿が、小さくなっていく。

○去っていく姿が、次第に遠ざかっていく。

～外観。～遠景。～の俯瞰映像。などの表現も、わかりにくい表現です。

・～風の、～のような、のように、あるものを例えて表現する場合も、例えとして取り上げているものを見たことがある、知っている前提がなければ、イメージができないため、具体的に表現することを心がけます。

例)×イギリス風の建物

○レンガ造りの建物

×ダースベイダーのような男

○全身、黒尽くめの大男。

(補足) 先天盲と中途失明の要望の違い

先天盲の方…耳に集中し、耳から認識する能力が発達しているため、ちょっとした動きや声色などで、動作や年齢、体格までも察してしまうため、細かい視覚的情報を音声ガイドに求めない。

中途失明の方…見えなくなって間もない方は特に、ま

だ見えていた頃の記憶が鮮明なので、できるだけ見えている時のように、音声ガイドで像を結びたいと思う。髪型、顔立ち、体格、年齢、服装など細かい視覚情報を音声ガイドに求める傾向があります。

5. 音声ガイドを聴く環境

(1)ラジオのFM受信

劇場で視覚障害者が一般の方と一緒に映画鑑賞を楽しむために、最初に試みたのはボランティアが隣に座って耳もとでコソコソ解説を行い、一緒に鑑賞する方法でした。しかし、これでは映画を静かに鑑賞したい一般のお客さまに迷惑となってしまいます。そこで導入したのがFM送信システムです。音声ガイドをFMの微弱電波で客席に飛ばすので、FMラジオの周波数をあわせれば、イヤフォンでこの音声ガイドを聴くことができます。

(2)赤外線ヘッドフォン

アメリカでは97年から、DTSシアトリカルという副音声システムを搭載した劇場が登場し、100館以上の映画館で「スター・ウォーズ」や「タイタニック」などの娯楽系の超大作が、公開初日からバリアフリー上映されており、受付で音声ガイド用のヘッドフォンを借りることができるそうです。(日本では、このような常設映画館はありません。)

(3)スマートフォン・タブレット端末

近年、日本でも、配給会社が自社で音声ガイドや字幕を制作し、劇場公開時にも期間・場所限定でバリアフリー上映を行うケースが年間数本ですが、増えてきました。NPO 法人メディア・アクセス・サポートセンターが開発協力をした「UDCast」というサービスを使って提供されることが主流となってきています。このサービスは、映画や映像作品の音声から同期情報を得ることで、スマートフォンやタブレット端末を使って、様々な言語をバリアフリー化させるアプリケーションサービスです。(無線 LAN 等の電波は一切不要) 音声を解析する「フィンガープリント」又は、人間の耳に聞こえない「音声電子透かし」を使って、スマートフォン等のマイクで時間情報を認識し、「日本語字幕」「音声ガイド」「外国語字幕」「手話」等のデータが完全に同期されます。「ワンソース」(ひとつの映像・音声)で「マルチユース」(多言語の字幕、音声ガイド、手話...etc.)を実現する新しい仕組みです。しかし、ユーザーである視覚障害者が端末を使いこなせないため、劇場でも端末の貸出や操作のサポートまでスタッフの対応ができず、普及が遅れています。

5. 常設のユニバーサルシアター設立へ

今年、2016年は、シティ・ライツが団体を設立して15年目。立ち上げ当初は、暗中模索だった音声ガイドや映画のバリアフリー環境も、今ではたくさんの方々の努力でノウハウも構築され、技術の進歩により広がりもみせています。

特に、今年4月から施行された「障害者差別解消法」の影響もあり、さまざまな事業者が、今、障害者に対してどのような“合理的配慮”を行ったらよいのか？を考慮しているところ、未だにこのような差別があっているのか？と、耳を疑うような事件も起こっています。

障害の有無に関わらず、誰もが映画を通じて心の交流ができる場所。誰もがいつでも安心して映画を楽しみ、仲間同士になれる場所。そんな、映画館のモデルとなるような、ユニバーサルシアターを創りたい！

施設のイメージは以下です。

- ・音声ガイド付き上映
(視覚障害のある方がいつでも映画を楽しめます)
- ・車椅子スペースと車いす対応トイレの設置
- ・親子連れ鑑賞室の設置
(小さなお子様連れでも映画を楽しめます)
- ・字幕付き上映
(聴覚に障害のある方がいつでも楽しめます)
- ・手話活弁士付きの上映
(先天的に聴覚の障害がある方でも楽しめるように定期的に行います)
- ・カフェタイムの設定
(映画鑑賞後に、障害のある人もない人も、感想をシェアすることができます)

もちろん晴眼者(=目が見える人)の来場も大歓迎です。障害のあるなしに関わらず、誰もが一緒に映画の感動を共有できる「ユニバーサルシアター」が私たちの目指す姿です。

6. ユニバーサルシアター設立支援募金開始

本格的な映画館の工事となると、かかる費用も莫大でした。防音工事や内装設計、すべて見積もっていただいたところ、およそ1500万円ほどの費用がかかります。とても膨大な金額ですので、悩みましたが、多くの方が、少しずつでも支援してくれたら、叶えられるはずだ！と思い直して、チャレンジに踏み出しました。

熊本では大規模な震災が起き、未だ原発も止まらない。無力さや不安に打ちのめされそうな日本で、多様な人々と共に映画を観て、心のコミュニケーションをとること。想像力を養うこと、夢をみること、共に学び、共に泣き、共に笑うことは、とても大きなエネルギーになるはず。障害をものともせず、なんでも楽しもうとチャレンジするエネルギー、思いやりと工夫を重ね、誰もが心地よいモノを探求するエネルギーは、たくさんの可能性の扉を開いていくことでしょう。

私たちはこのシアターを“ユニバーサルデザイン”の発想から開発された様々なツールをお試しいただけるようにし、開発業者と共に、誰にとっても心地のよい音・気・振動等の可能性も追求していきたいと思っています。

この資料をお読みくださった方が、一人でも夢の映画館・ユニバーサルシアターの設立にご協力をいただけましたら幸いです。

夢の映画館・ユニバーサルシアター設立支援に関する詳細ページ

<http://www.citylights01.org/bokin.html>

問合せ先：

バリアフリー映画鑑賞推進団体 City Lights 事務局

〒114-0013 東京都北区東田端 2-8-4

マウントサイド TABATA 201 号

TEL (03) 3917-1995

FAX (03) 3917-1995

e-mail : mail@citylights01.org